



Title	刊行に寄せて
Author(s)	水谷, 純也
Citation	北海道大学農学部技術部研究・技術報告, 2
Issue Date	1995-03
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/35284">http://hdl.handle.net/2115/35284</a>
Type	bulletin (article)
File Information	2_kankou.pdf



[Instructions for use](#)

## 刊行に寄せて

技術部長 水谷 純也（農学部長）

北海道大学農学部技術部が昨年引き続いて研究・技術報告第2号を発行することになった。「北海道大学農学部技術職員組織内規」の施行により、平成3年4月農学部に技術部が誕生してから4周年を迎えようとしている。平成4年度には第1回の職員研修を行い、その後第2回、第3回と回を重ね技術部職員研修もすっかり軌道に乗ったように見える。今回研究・技術報告第2号ということで、このほうも着実な歩みを続けていくことになるものと思われる。この時点で教育研究支援体制としての北海道大学農学部技術部に対して何を期待するか述べておきたい。

この度の兵庫県南部地震において、自然災害の甚大さとそれに対する人の力・人工の脆弱さをいやというほど見せつけられた。これまでの科学技術の進歩は何だったのか。砂上の楼閣であったのか。いや、決してそうではない。関東大震災の後、たとえば日本の建築技術が画期的進歩を遂げたことは、人間の英知と不撓不屈の精神の現われとして評価したい。阪神大震災においても被災された多くの人達が一日も早く、復旧復興に向けて先ず自力で立ち上がってくれることを念願するものであるが、自然災害から与えられた教訓は防災・安全対策への新たな道を拓くことにつながるであろう。

さて、本論にもどって肝腎の科学技術であるが、最近の進歩は目覚ましいものがあると言えてよいと思われる。とくに科学の応用としての技術の開発、新しい知識（体系化された知識が科学である。）を生み出すための手法（技術）の開発は研究者にとってひとときも忘れてはならない課題である。農学分野の研究は高度化、先端化が進み、そこから学際領域が生まれている。研究者も専門領域をより深くというだけでなく、関連分野の手法を駆使して問題解決のための突破口を切り開いていかなければならない。そのためには技術系職員の協力が欠かせないものとなってくるし、研究者と研究支援者としての技術系職員が相補完し合って研究を発展させていくことが望ましい。

教育研究支援業務には従来の研究補助、熟練技能提供等に加えて、高性能で先端的大型設備の設置に伴うその運転・維持管理等、高度の知識と技術が要求されるようになってきた。わが農学部も大学院重点化の方向で改革構想を検討しており、近い将来その実現が期待されている。したがって、教育研究のレベルアップを図っていく必要があるし、ますます技術系職員に対する期待が大きくなってくる。優秀な技術者を養成するには時間がかかることも事実である。技術部としても定期的な研修だけでなく、機会あるごとに講習会、セミナー、ユーザーズ・ミーティングなどへ技術系職員を出席させて、新しい知識や技術を修得させる努力をしなければならない。しかし、このためには農学部教職員全体の理解と協力が必要になる。一方、本当に技術系職員が農学部・農学研究科の教育研究支援機能を果たすためには、処遇改善を含めた組織の見直しが必要ではないかと思われる。

終わりに、技術部の今後の発展と各位のご健闘を祈念申し上げます。

平成7年2月